

## 近代化産業遺産の「建築・現代アート・環境」をテーマにした 保存・再生とその運営

福 武 總一郎 殿

福武總一郎氏は、瀬戸内海に浮かぶ島において、自然の中で建築と融合した様々な現代アート活動を推進してこられた。

1980年代後半から始められた直島における活動は、同氏のプロデュースによって様々な形で展開されてきたが、町並みを保存しながら、使われていない古民家を修復することによって現代アートのインスタレーションの場とする、「家プロジェクト」などは、現代アートと伝統的な建築とが一体となって生み出す新たな文化活動として高く評価されている。また、地中美術館の建設では、安藤忠雄氏に設計を託し、現代美術作家のための空間を、島の丘の上の地下に実現している。そして、2004年には財団法人直島福武美術館財団を設立し、理事長を務められている。

同氏のプロデュースによる財団とベネッセホールディングスの活動「ベネッセアートサイト直島」は、瀬戸内海の島を舞台として、建築と現代アートによる地域振興を目指すものであり、島全体にわたる現代アートの展示会の開催などにより、島の活性化に大きく貢献してきた。さらに、同氏の企画による直島コンテンポラリーアートミュージアムも、ベネッセホールディングスの企業ミュージアムとしてスタートしたが、地域の公共的な性格をもつ観光拠点施設「ベネッセハウス」として広く活用されるようになっていく。

さらに、直島の北東に位置する犬島では、明治期の近代化産業遺産である銅の精錬所に手を加え「建築・現代アート・環境」をテーマにした美術館、犬島アートプロジェクト「精錬所」として再生させるプロジェクトを企画し、交通手段の不便な島であればこそその魅力に溢れた場を実現している。このプロジェクトでは、煉瓦造の煙突などが残る精錬所を対象とする難易度の高い建築の再生設計に三分一博志氏、アーティストに柳幸典氏を起用するなど、優れたプロデューサーとしての人材発掘力を如何なく発揮している。また、単にアートのための構築物を創るのではなく、近代化を進めてきた先のあるべき形としての、環境負荷を最小限に留めた建築を目指すことにより、産業遺産の地としての犬島の特性を活かすべく、新たな環境改善技術の導入などが試みられており、次のアートプロジェクトの計画も進められている。犬島に渡れば、百年の時の流れを振り返えざるをえない舞台装置に身を置くことになる。船でしか渡ることのできない犬島を舞台として選定したことにも、同氏の優れた眼力と実行力を見ることができよう。

このような同氏の、単なる建築の理解ある施主という立場を超えた、文化を耕すプロデューサーとしての活動は、建築文化の向上に多大な貢献を果たすものであり、日本建築学会文化賞にふさわしい業績である。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。